

## 編集後記

第 27 巻 1 号をお届けします。関係各位のご努力で本来の発行日に若干ながら近づくことができました。

さて、巻頭言には 2011 年夏にポーランドのカラコフで開催予定の第 17 回 ICFA の実行委員長であります Koscielniak 教授にお願いしました。カラコフは、日本の京都に相当するような古い都があった街だそうです。この国際会議への参加の大きな動機づけになることと思います。巻頭言にも日本からの多くの参加者の期待が込められています。日本側からの巻頭言としては、高知大学の受田浩之先生にご寄稿いただきました。食品の二次機能の評価の観点から入られた FIA 法ですが、高知という地元に着した産学官の連携から生まれた「基石茶」の高抗酸化能発見の成功例を引いていただき、FIA の将来性を語っていただきました。

指標欄には、本研究懇談会の編集委員にお加わりいただきました大阪府立大学の長岡 勉先生より「Getting the most out of it!」というタイトルでご寄稿いただきました。FIA という言葉がまだない時代から「フロー電解」を行っておられた FIA の大先輩でもあります。お金がなくても、立派な機器がなくても、人間の能力を十二分に発揮すれば、なしえないものはないという、戒めをいただいた気がいたします。

総説の欄には、中国の瀋陽にあります東北大学の Wang 教授に「Developments in Protein Assays with Flow Injection/Sequential Injection Techniques」というタイトルでご寄稿いただきました。本総説は、Wang 先生が昨年の東京コンファレンスの際にご出席の際に、本懇談会の委員長であります酒井先生よりお願いしていただいたもので、今回ようやく実現いたしました。

研究論文の欄には、今回は国外から 7 報と国内から 1 報の合計 8 報の論文が投稿されました。次号に

も会員の皆様からのたくさんのご投稿をお待ちしております。

群馬大学の板橋先生には長い間トピクス欄の記事のご担当をいただきましたが、公務がお忙しくなられましたので、小川商会の樋口慶郎氏にお願いしました。日産化学工業の中島淳一様からは化学発光検出器の開発動向について、また、大阪府立大学の村中祐輔氏、椎木 弘先生からは磁性ナノ粒子を用いた FIA についてご紹介いただきました。企業関係の会員の皆様からもぜひたくさん投稿していただければ幸いです。

報告の欄には本年 4 月 25 日～30 日にタイのリゾート地でありますパタヤで開催されました第 16 回 ICFA の報告記を静岡大学の栗原 誠先生にご寄稿いただきました。当時はタイ国内の不安な政治情勢のため日本での警戒レベルが 1 ランク高められて時でした。栗原先生のご寄稿を拝読して当時の様子が思い出されました。Christian 教授には英文で報告記を書いていただきました。特に、Scientific program については、分野別に詳しくご紹介いただきました。ご参加できなかった皆さまにも研究の動向がお分かりになることと存じます。記事の中の写真は愛知工業大学の手嶋紀雄先生にご自身のお持ちのものも含めてレイアウトしていただきました。また、愛知工業大学の上田 実さんにはタイのチェンマイ大学に滞在された時の様子をご寄稿いただきました。

国内の学会情報は、長い間、徳島大学の田中秀治先生にお願いしました。次回からバトンタッチの予定です。FIA Bibliography は神奈川工科大学の飯田泰広先生にお願いしています多くの論文を集めていただきました。

今後ともこの会誌が本会員の皆様方の情報交換の場になることを希望しております。ご寄稿をお待ちしております。

JFIA 編集委員長  
今任稔彦